岐阜駅を中心とした繊維産業形成と復興期の土地編成が産んだ職住一体型の戦後空間の形成過程に関する史的研究

代表研究者　石榑 督和（関西学院大学建築学部准教授）
共同研究者　荒木 菜見子（米子工業高等専門学校総合工学科建築デザイン部門講師）
〃　清山 陽平（京都大学大学院工学研究科建築学専攻助教）
〃　和田 蕗（岐阜工業高等専門学校建築学科助教）

［研究報告要旨］

本研究の目的は、岐阜駅前において既製服の製造卸業者の店舗併用住宅および共販所が集合したエリアとして形成が進んだ繊維問屋街（岐阜市問屋町・金町８丁目・住田町）と、関連業者の店舗併用住宅が集積した周辺地区(岐阜市日ノ本町・長住町)を対象に、建物の実測調査と、戦災復興土地区画整理事業の換地と土地所有を分析することで、形成過程を明らかにすることである。

ハルピン街建設以降の町屋（長屋）群の形成過程、市場（共販所）の形成過程を明らかにした。端的に言えば、ハルピン街以降は北西の日ノ本町と西問屋町の形成が進み、その後駅前の共販所、問屋町のうち西側の一条通り、中央通り、現金問屋街が建設され、その後は東に向かって建設が進んでいったことを明らかにした。またその際、多くの町屋（長屋）群は道を東西に通し、その道に沿って南北に町屋（長屋）を並べていったことが明らかになった。この過程は駅前の戦災復興区画整理事業の仮換地が公表されて以降に進んだ空間形成であった。すなわち、区画整理による計画的な道路計画と地割を前提としたものではなく、各通りをつくった集団が扱える土地に道を通し地割をすることで形成を進めた、ボトムアップ的な市街地形成であった。

それぞれの地区は、町屋（長屋）という類型の中で差異を持った多様な事例として現れている。組織は時に不合理な変形を持ち、問屋町の中には道路が曲がっている場所もある。地方都市の駅前でありながら、特異な形成過程を示す市街地であることが明らかになった。